



TITLE:

# 戦國時代の都市とその支配

AUTHOR(S):

江村, 治樹

---

CITATION:

江村, 治樹. 戦國時代の都市とその支配. 東洋史研究 1989, 48(2): 195-234

ISSUE DATE:

1989-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154276>

RIGHT:

# 東洋史研究

第四十八卷 第二號 平成元年九月發行

## 戰國時代の都市とその支配

江村 治 樹

### 一 はじめに

#### 二 戰國都市の分布と規模

(一) 考古學的遺跡による検討

(二) 出土文字資料による検討

(三) 文獻史料による検討

(四) 都市の發達と交通路

#### 三 戰國諸國家の都市支配

(一) 三晉地域の諸國家

(二) 周邊地域の諸國家

#### 四 むすび

### 一 はじめに

戰國時代を中心とする時代は、都市が大いに發達した時代であることは異論がないところであろう。しかし、この時代

の都市の性格については、大きく分けて二つの相對立する見方が存在する。

その一つは、宇都宮清吉氏を代表とする見方であり、この時代の都市の發達に對して經濟的な要因を重視する見方である。宇都宮氏は、「西漢時代の都市」<sup>(1)</sup>において、前四、三世紀の中國にはすでに世界經濟圈が成立していたとみなし、それを成立させたのは共通貨幣としての黄金と世界交通路の成立であつたとしている。そして、この交通路にそつて都市が發達し、前三世紀から前二、一世紀には農村人口六割に對して、商工民を中心とする都市人口は三割に達していたと豫測している。すなわち、氏によると、戰國時代から前漢時代にかけての都市の發達は、世界經濟圈の成立という純粹に經濟的な要因によるものであり、都市の住民も商工民が大部分を占めていたとされるのである。

このような古代都市に對する見方は、他の日本の研究者の中にも見られるが、むしろ中國の研究者に一般的である。楊寬氏は、すでに『戰國史』の舊版において、春秋戰國の間に農業、手工業生産の發展によつて商品經濟の發展が起こり、それにとつて各國に大商業都市の發達と人口の都市集中が起こつたとしている。このような見方は、近年ではさらに一般化している。俞偉超氏などは、戰國から前漢時代にかけて、農業、手工業、商業の新しい發展と分業化の進行によつて新しい都市が形成され、全人口の三分の一以上が都市に集中していたと豫想している。<sup>(4)</sup>また、張鴻雁氏も、戰國時代の都市は大體商工業都市で、その人口は全人口の二〇パーセントを占めていたとみなしている。<sup>(5)</sup>この他の中國の研究者も、この時代の都市を經濟的な要因によつて發達した商工業都市とみなす點では共通しているようである。<sup>(6)</sup>

これに對して、この時代の都市の發達に對して經濟的な要因を第一義的なものとみなさない考え方が存在する。それは、上記の宇都宮氏の見方に對する批判として出された宮崎市定氏の見解である。氏は、「戰國時代の都市」<sup>(7)</sup>において、戰國時代に都市の發達を認めるものの、それを一律に經濟的發展と結びつける前に、中國の歴史上にいかなる位置を占め、いかなる意義を有するかを考える必要があるとする。そして、結局、中國古代の城郭都市の本質は商工業都市ではなく、或る農業都市であり、「戰國時代における大都市の發達は、純粹に經濟的な要因によるものではなく、最も多く政治的、或

いは軍事的な理由による繁榮であつた」と結論づけている。さらに、氏の言葉を引用すれば、「戦國時代に中國の都市と商業は著しい發達を遂げたが、それは一面甚だ人爲的且つ不自然な、またアンバランスなもの」であり、「主として政治的な中央集權政策の強行によつて生じたもので、首都もしくは一、二の重要な軍事都市に限られており、大多數の地方都市は依然として、むしろ微力な農業都市に止まっていた」とも述べている。そして、この時代の都市の規模については、首都やこれに準じる都市は大都市として發達したが、一流都市で萬戸、二流都市で千戸、その他はおおむね二、三百戸というのが普通であつたとしている。

このような見方は、その後多くの日本の研究者に受け繼がれている。伊藤道治氏はこの説を考古學的な材料によつて補強しており、影山剛氏もこの見解をそのまま承認してこの時代の商工業について論じている。また、近年でも、この時代の都市の發達に政治的、軍事的な要因を重視する考え方は、池田雄一氏<sup>(10)</sup>、五井直弘氏<sup>(11)</sup>、佐原康夫氏<sup>(12)</sup>などの都市論に見られるが、上述の宇都宮氏のような見方はむしろ少數であるといつてよい。

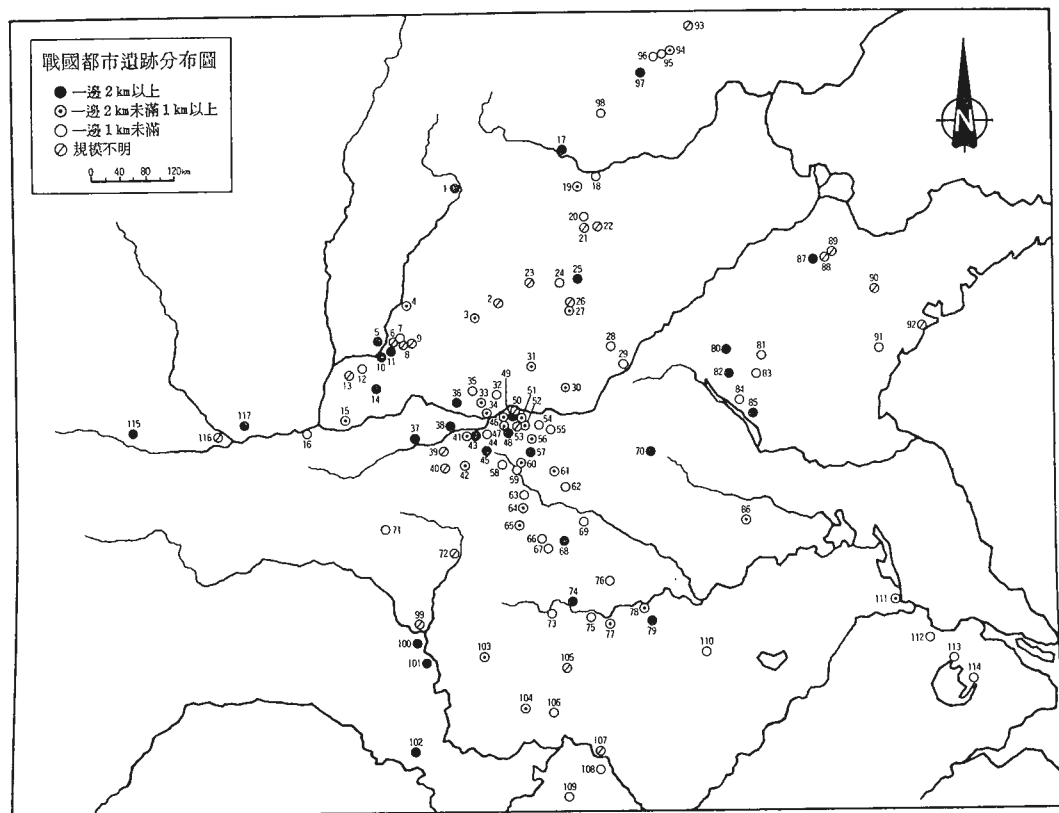
では、このような相對立する見方はいかにして生じてきたのであろうか。また、いずれの見方が歴史的に正しいのであろうか。近年、古代都市に關する考古學的な遺跡、遺物の發見が豊富になり、このような間に對しても一定の解答を與えることができるようになってきたと思われる。わたしは、先に「戦國三晉都市の性格」<sup>(13)</sup>によつて、主として三晉地域の都市に限定して、考古學的な見地からこの時代の都市の性格について考察したが、ここでは、その對象を全中國に擴げて考へてみたい。

## 二 戦國都市の分布と規模

### (一) 考古學的遺跡による検討

表一「戦國都市遺跡表」は、一九八九年五月の段階で實見することのできた報告書<sup>(14)</sup>にもとづいて、戦國時代を中心とす

圖一 戰國都市遺跡分布圖



る都市遺跡の所在地と規模を表にしたものである。この表のほとんどの遺跡は、時間的に前の春秋時代、あるいは後の漢代にもわたるものであるが、出土遺物から明らかに戦國時代にも存在したと考えられるものを取り上げた。この表では、かなり零細な調査報告を含めて一一七例の都市遺跡を確認することができる。

表一にもとづいて、一定範囲内の都市遺跡の位置と規模を示したものが圖一「戰國都市遺跡分布圖」である。この地圖では、遺跡の規模を城壁の最大長邊で示した。凡例の「一邊二km以上」、「一邊二km未満一km以上」とは、それぞれ城壁の最大長邊が二km以上、二km未満一km以上と言うことである。中國の考古學の報告書では、城壁の形態を示す圖面を掲載し、その各部分の寸法を明記したものはあまり多くない。圖面を載せずに東西、南北の城壁の長さのみ記すもの、あるいは城壁の全長（周長）のみを記すものや、さらに遺跡の面積のみを記すものなど、きわめて簡略な報告が多い。このような報告書の状況では都市遺跡の規模の正確な比較は望みようはないし、また不可能である。分布圖で都市の規模を最長邊のみで示したのは、このような資料の状況による。確かに、城壁は必ずしも直線的ではなく、かなり複雑に屈曲したものもある。また、都市の形が正方形に近いものと長方形のものとは、當然その規模は異なってくる。だが、これも一邊を一km、二kmというように大きく區分した場合には、それぞれの境界部分を除いて、實際の規模を大きく外れることはないと思われる。なお、周長のみしかわからない場合はその四分の一を一邊の長さとし、面積のみの場合はその平方根を一邊の長さとして假定した。

表一には一一七例の都市遺跡を挙げたが、うち一九例は報告書に規模の記載がなく、残る九八例が一應規模のわかるものである。うち一邊が一km以上のものは五六例あり半數を越える。そして、そのうち一邊が二km以上のものは二九例もある。二km以上のものには、國都を多く含み、とりわけ四kmを越えるものは戰國時代の大國の首都がほとんどである。14例王城はもと魏の首都、17靈壽古城は中山、25大北城は趙、57鄭韓故城は韓、87臨淄故城は齊、102紀南城は楚の首都であり、一邊が九kmに達する97燕下都は燕の首都である。したがって、一國の首都がきわめて巨大であったことを強調する宮

表一 戰國都市遺跡表

城 址 名	所 在 地	規 模 m (東西, 南北)	出 典
1. 古 晉 陽 城	山西, 晉原	3600?, 2700	文62—4·5
2. 潞 城 古 城	山西, 潞城	210-, 350-	文86—6
3. 長 子 古 城	山西, 長子	590-, 1840	考學84—4
4. 古 羊 舌 城	山西, 洪同	1300, 580	考63—10
5. 趙 康 古 城	山西, 襄汾	1650, 2700	考63—10
6. 故 唐 城	山西, 翼城	?	文82—7
7. 北 壽 城 古 城	山西, 翼城	800, 800	文82—7
8. 故 翼 城	山西, 翼城	?	文82—7
9. 北 絳 故 城	山西, 翼城	?	文82—7
10. 牛 村 古 城	山西, 侯馬	1400, 1740	考59—5
平 望 古 城	山西, 侯馬	1100?, 1300?	侯馬盟書
白 店 古 城	山西, 侯馬	800?, 1000?	侯馬盟書
馬 莊 古 城	山西, 侯馬	500?, 300?	侯馬盟書
程 王 古 城	山西, 侯馬	600, 500	文88—3
11. 曲 沃 古 城	山西, 曲沃	3100, 2600-	考59—5
12. 大 馬 古 城	山西, 聞喜	998, 980	考63—5
13. 汾 陰 故 城	山西, 萬榮	?	考59—4
14. 禹 王 城	山西, 夏縣	3565, 4980	考63—9
15. 古 魏 城	山西, 芮城	1150, 1268	文62—4·5
16. 華 陰 古 城	陝西, 華陰	140-, 285	考59—11
17. 靈 壽 古 城	河北, 平山	4000, 4500	第三次年會
18. 蒿 城 故 城	河北, 蒿城	48600m <sup>2</sup>	文叢1
19. 元 氏 故 城	河北, 元氏	1100, 1100	文叢1
20. 柏 暢 城	河北, 臨城	420, 600	文88—3
21. 柏 人 城	河北, 內丘	?	河北選集
22. 柏 人 城	河北, 隆堯	?	文88—3
23. 固 鎮 城	河北, 涉縣	?	河北選集
24. 午 汲 古 城	河北, 武安	889, 768	考通57—4
25. 趙 王 城 (東)	河北, 邯鄲	926, 1442	文81—12
(西)	河北, 邯鄲	1354, 1390	文81—12
(北)	河北, 邯鄲	1410, 1520	文81—12
大 北 城	河北, 邯鄲	3240, 4880	文81—12
26. 白 陽 城	河北, 磁縣	?	河北選集
27. 講 武 古 城	河北, 磁縣	1140, 1277	考59—7
28. 孔 悝 城	河南, 濮陽	周長1520	河南
29. 戚 城	河南, 濮陽	1萬m <sup>2</sup>	中原86—4
30. 吳 起 城	河南, 延津	周長7600	河南
31. 共 城	河南, 輝縣	1200, 1300	中原83特
32. 焦 作 古 城	河南, 焦作	295.5, 277	文58—4
33. 州 城	河南, 溫縣	1680, 1780	文83—3

34. 北平皋古城	河南, 溫縣	周長4000餘	文82—7
35. 邳邳古城	河南, 沁陽	53萬m <sup>2</sup>	河南
36. 軹城古城	河南, 濟源	周長8000	河南
37. 宜陽古城	河南, 宜陽	1810, 2220	中原88—3
38. 東周王城	河南, 洛陽	2890, 3000—	考學59—2
39. 古城遺址	河南, 伊川	?	河南
40. 古城廢墟	河南, 汝陽	?	考58—1
41. 劉國故城	河南, 緱氏	650, 1220	中原85—4
42. 慶陽故城	河南, 臨汝	周長6800	河南
43. 滑城	河南, 偃氏	1000, 2000	考64—1
44. 米北古城	河南, 鞏縣	110, 350	中原86—4
45. 陽城	河南, 登封	700, 2000	文77—12
46. 大索城	河南, 滎陽	1000, 500	河南
47. 小索城	河南, 滎陽	1000, 600	河南
48. 京襄城	河南, 滎陽	1500, 2000	河南
49. 滎陽故城	河南, 滎陽	2012, 2016	中原83特
50. 河陰故城	河南, 滎陽	500—, 400—	中原86—4
51. 常廟城	河南, 鄭州	周長5000餘	中原86—4
52. 鄭州商城	河南, 鄭州	1700, 1870	文叢1
53. 道李故城	河南, 鄭州	?	中原86—4
54. 西古城	河南, 中牟	周長2000	河南
55. 東古城	河南, 中牟	周長2000	河南
56. 華陽故城	河南, 新鄭	周長5000	河南
57. 鄭韓故城	河南, 新鄭	5000, 4500	文叢3
58. 康城村古城	河南, 禹縣	周長3000	河南
59. 八里營古城	河南, 禹縣	周長3000	河南
60. 古城村古城	河南, 禹縣	周長5200	河南
61. 鄆陵古城	河南, 鄆陵	998, 1595	考63—4
62. 扶溝古城	河南, 扶溝	480, 800	中原83—2
63. 西不羹城	河南, 襄縣	周長1500	河南
64. 舞渡古城	河南, 舞陽	周長5500	考通58—1
65. 合伯故城	河南, 舞陽	周長6500	河南
66. 斗城故城	河南, 遂平	周長2086	河南
67. 吳房故城	河南, 遂平	周長3775	河南
68. 蔡國故城	河南, 上蔡	2700, 3187	江漢85—2
69. 商水古城	河南, 商水	800, 500	考83—9
70. 宋國故城	河南, 商丘	周長10000	河南
71. 西峽古城	河南, 西峽	800, 850	考通56—2
72. 南陽古城	河南, 南陽	?	考通56—2
73. 楚王城	河南, 信陽	周長3587	河南
74. 建安故城	河南, 正陽	周長10000	河南
75. 息國故城	河南, 息縣	周長2532	河南



76. 新蔡故城	河南, 新蔡	周長3215	河南
77. 黃國故城	河南, 潢川	1800, 1650	中原86—1
78. 蔣國故城	河南, 淮濱	周長4400	河南
79. 蓼國故城	河南, 固始	周長13500	河南
80. 曲阜魯故城	山東, 曲阜	3500, 2500	魯故城
81. 東周故城	山東, 泗水	800, 700	考65—1
82. 紀王城	山東, 鄒縣	2530, 1180	考65—12
83. 康王城	山東, 鄒縣	300, 500	集刊3
84. 滕城(內城)	山東, 滕縣	850, 590	考65—12
85. 薛城	山東, 滕縣	3265, 2480	考65—12
86. 蘄縣古城	安徽, 宿縣	?, 1000	文78—8
87. 臨淄故城	山東, 臨淄	3316, 5209	文72—5
88. 安平故城	山東, 臨淄	?	文88—2
89. 臧臺故城	山東, 益都	?	文88—2
90. 杞國故城	山東, 安丘	?	文86—3
91. 盤古城	山東, 五蓮	236, 213	文86—3
92. 靈山衛故城	山東, 膠南	?	文86—3
93. 燕上都	河北, 北京	?	考80—2
94. 蘆村古城	河北, 房山	1400, 800	文59—1
95. 長溝古城	河北, 房山	500, 500	文59—1
96. 蔡莊古城	河北, 房山	300, 300	文59—5
97. 燕下都	河北, 易縣	9046, 3980	考學65—1
98. 唐縣古城	河北, 唐縣	750, 750	文57—8
99. 鄧城	湖北, 襄陽	?	江漢83—2
100. 歐廟土城	湖北, 襄樊	2250, 4200	江漢80—3
101. 鄧故城	湖北, 宜城	1500, 2000	江漢85—2
102. 紀南城	湖北, 江陵	4502, 3751	考學82—3
103. 安居古城	湖北, 隨州	800, 1000	江漢84—4
104. 雲夢故城	湖北, 雲夢	1600, 1000	江漢83—2
105. 呂王城	湖北, 大悟	殘長100	江漢85—3
106. 作京城	湖北, 黃陂	200, 144	江漢85—4
107. 禹王城	湖北, 黃岡	?	江漢87—1
108. 草王嘴古城	湖北, 大冶	周長945	江漢84—4
109. 鄂王故城	湖北, 大冶	500, 400	江漢83—3
110. 西古	安徽, 六安	20萬m <sup>2</sup> 以上	文88—2
111. 邗城	江蘇, 揚州	1980, 1400	文79—9
112. 淹城	江蘇, 常州	850?, 700?	文59—4
113. 古閶閭城	江蘇, 無錫	周長1500	考58—1
114. 越城	江蘇, 蘇州	400, 450	考82—5
115. 雍城	陝西, 鳳翔	3300, 3200	考與文85—2
116. 咸陽故城	陝西, 咸陽	?(902, 576)	考與文88—5·6
117. 櫟陽故城	陝西, 臨潼	2500, 1600	考學85—3

崎氏の考えは誤ってはいないと考えられる。

また、戦國時代に巨大都市が形成されたことも、都市遺跡の規模から見て間違いないようである。現在、西周から春秋時代のものと考えられる規模のわかる都市遺跡は一六例確認できるが、一邊が1kmを越えると思われるものは三例にすぎない<sup>(15)</sup>。一方、秦漢時代で規模のわかるものは一應七一例確認できる。このうち一邊1km以上のものは二〇例あるが、一邊2km以上のものとなると八例と少なくなる<sup>(16)</sup>。現在確認できる秦漢時代の都市遺跡は、遼寧、内蒙古、青海など邊境の小さな軍事的都市を多く含んではいるものの、伊藤道治氏がすでに指摘しているごとく<sup>(17)</sup>、漢代になると都市が縮小することは確かかなようである。戦國時代には確かに都市の爆發的發達があったと考えてよいであろう。

次に、圖一「戦國都市遺跡分布圖」によって都市遺跡の分布傾向を見てみると、明らかに遺跡の集中しているいくつかの地域が見出される。特に集中の著しい地域は河南省中央部である。31共城以南、67吳房故城以北、37宜陽古城以東、69商水古城以西の東西、南北それぞれ二五〇km前後の範圍内に四〇の遺跡が集中している。そして、この範圍内には一邊2km以上の遺跡九、一邊2km未満から1km以上の遺跡一三を含み、1km以上のものが半数を越える。とりわけ、巨大都市の集中度の高い地域は、現在の洛陽、鄭州の周邊であり、一邊1kmを越える遺跡が直線距離で大體四〇kmから二〇kmの間隔で散在している<sup>(18)</sup>。この地域以外にも、山西省南部、山東省東部、淮水上流、そして太行山脈ぞいに遺跡の集中した地域が認められるが、以上の河南省中央部とは比ぶべくもない。

だが、このような都市遺跡の分布のみによって、戦國時代に河南省中央部にのみ顯著な都市の集中的發達が起こったとは即断できない。實のところ、現在の中國における都市遺跡の調査の進行程度には明らかに精粗があるのである。遺跡の最も集中している河南省は、全國的に見て遺跡の一般調査はかなり進んでいるが、他の地域はそれほどでもない<sup>(19)</sup>。圖一のごとく、河南省中央部が都市の集中して發達した地域であったことはまず間違いないであろうが、他に同じように都市の集中發達した地域がなかったとはいえない。したがって、都市の分布や規模に關しては、他の材料によって検討してみる

必要がある。

## (二) 出土文字資料による検討

戦國時代になると、貨幣や銅器、漆器、陶器などの器物に地名を鑄込んだり、刻したりした銘文が多くなる。こうした地名は、その器物を使用する場所を示す場合もあるが、多くは製造した場所を示す。<sup>(20)</sup>したがって器物に附された地名によって、その製作場の所在を知ることができる。そして、このような製作場の所在地は、單なる農業を中心とする集落ではなく、多くの場合、ある程度の經濟力を有する都市であったと考えられる。とりわけ、貨幣や銅器を鑄造したところは相應の都市であつた可能性が高い。貨幣を含めた銅器の鑄造には、青銅の材料の調達と溶解、鑄型の製作と實際の鑄造など、高度の技術と分業化が必要であり、それを可能とする經濟的基盤が必要とされたと考えられる。そして、中でも貨幣の場合は、それを發行するには、その信用を支えることのできる經濟力が不可欠であつたと考えられる。實際に、貨幣や銅器を製造したのが都市であつたことは、都市遺跡との關係でも證することができる。現實の都市遺跡の内部にそうした製作場の遺跡が発見されており、また都市遺跡が比定されている地名と同一の地名が貨幣や銅器にも見られる場合がかなりあるのである。<sup>(21)</sup>したがって、この時代の器物、とりわけ貨幣や銅器の地名を検討することによって、經濟的な力をもつた都市の分布をある程度推定することも可能ではないかと考えられる。

表二「戦國出土文字資料地名表」は、貨幣、銅器、漆器、陶器などに附された製造地を示すと考えられる地名の中で、位置を比定することのできるものの一覽表である。そして、この表の地名の比定地と前出の圖一「戦國都市遺跡分布圖」の都市遺跡の位置とを重ね合わせたものが圖二「戦國都市分布圖」である。

地名を有する器物で最も地名の種類が多いのは貨幣である。戦國時代には、様々な形態の貨幣が國や都市で發行され、その大部分に地名が鑄込まれている。<sup>(22)</sup>なかでも、三晉地域を中心として流通したとみなされる尖足布と方足布に鑄込まれた地名の種類は非常に多い。鄭家相『中國貨幣發展史』<sup>(23)</sup>によると、前者の地名は三一種類、後者の地名は六六種類にのぼ

表二 戰國出土文字資料地名表

地 名	城址 番號	貨 幣	銅 器	そ の 他	
1. 薳	1	尖足布	武器		
2. {新城? 郭?		尖足布 尖足布			
3. 孟		尖足布			
4. 晉陽		尖足布, 橋形布, 圓足布, 圓錢, 直刀			
5. 榆次		方足布, 尖足布	武器		
6. 陽邑		方足布, 尖足布, 圓足布			
7. 閼與			武器		
8. 祁		方足布			
9. 茲氏		尖足布, 圓足布	武器		
10. 西都		尖足布			
11. 中都		方足布, 尖足布	武器?		
12. 平周		尖足布, 圓足布			
13. 鄒		方足布	武器, 衡器		
14. 漆垣					
15. 蘭		方足布, 尖足布, 圓足布, 圓錢, 直刀	武器		
16. 離石	尖足布, 圓足布, 圓錢				
17. 中陽	尖足布				
18. 涅	方足布				
19. 上黨		武器			
20. 襄垣	方足布				
21. 銅鞮	方足布				
22. 屯留	方足布				
23. 潞	2	方足布	武器		
24. 長子	3	方足布			
25. 蒲子		方足布, 尖足布	武器		
26. 彘		方足布, 橋形布			
27. 大陰		尖足布, 圓足布	武器		
28. 北屈		方足布			
29. 平陽		方足布			
30. 皮氏		方足布			
31. (新田)	10	大型空首布 (製作場)	陶範 (製作場)		(陶器, 骨器製作場)
32. 安邑	14	橋形布	容器		
33. 垣?		橋形布, 圓錢			

34. 虞		橋形布, 圓錢			
35. 榮錡氏		方足布			
36. 蒲坂?		橋形布	武器		
37. 陰晉	16	方足布, 橋形布	武器		
38. 焦			武器		
39. 虢?		尖足布			
40. 盧氏		空首布, 銳角方足布			
41. (中山)	17	直刀 (製作場)	(製作場)	(鐵器, 骨器, 玉器, 石器製作場)	
42. 緜			武器		
43. 柏人	21	直刀			
44. 邢			武器		
45. 馬服		方足布			
46. 武安?	24	尖足布, 空首布		(陶器製作場)	
47. 邯鄲	25	尖足布, 大型空首布, 直刀	武器, 容器	(陶器, 鐵器, 骨器, 石器製作場)	
48. 鄴			武器		
49. 平邑		方足布			
50. 頓丘			武器		
51. 朝歌			武器		
52. 共	31	方足布, (大型空首布), 橋形布, 圓錢	武器		
53. 高都		方足布	武器?		
54. 長垣		圓錢			
55. 酸棗		方足布			
56. 脩餘			武器		
57. 安城		空首布, 圓錢	武器		
58. 寧		方足布?	武器, 容器		
59. 宅陽		方足布			
60. 隰城		方足布			
61. 山陽		橋形布			
62. 邴	35	方足布	武器		
63. 州	33		武器, 容器		
64. 邢丘	34			陶器	
65. 東周		方足布, 空首布, 圓錢			
66. 平陰		方足布			
67. 西周(王城)	38	圓錢	武器?	(陶器, 骨器, 玉器製作場)	
68. 宜陽	37	方足布	容器		
69. 新城	39	尖足布?	武器		
70. 綸氏		方足布?	武器	銀容器	

71. 陽人	42	尖足布？	武器	
72. 陽城	45	方足布	武器	陶器，（鐵器製作場）
73. 京	48	橋形布		
74. 滎陽	49			陶器，（鐵器製作場）
75. 亳（管）	52	空首布		陶器
76. 梁（大梁）		方足布，橋形布	武器，容器	
77. 啓封			武器	
78. 鄭	57		武器，容器（製作場）	（陶器，鐵器，骨器，玉器製作場），漆器
79. 雍氏	60		武器	
80. 梧			武器	
81. 許		方足布		漆器
82. 桐丘			武器	
83. 魯陽		方足布，三孔布		
84. 申陰			武器	
85. 陳		金版		
86. 武平		尖足布？	武器？	
87. 野			武器	
88. 阿			武器	
89. 平原？		方足布		
90. 譚？		刀錢		
91. 無鹽			武器	
92. 平陸			武器	
93. 倪			武器	
94. 武城			武器	
95. 戕丘			武器	
96. 鄆		金版		
97. 莒？		刀錢		
98. 齊（臨淄）	87	刀錢（製作場），圓錢？	（製作場）	陶器，（鐵器，骨器製作場）
99. 高密			武器	
100. 卽墨		刀錢		
101. 涿		方足布		
102. 燕（下都）	97	刀錢（製作場），圓錢？	（製作場），武器	陶器（製作場），（鐵器製作場）
103. 益昌		方足布		
104. 武坪		尖足布	武器？	
105. 郢	102	金版	（製作場）	（陶器製作場）
106. 安陸	104			陶器
107. 咎奴		方足布	武器	
108. 烏氏				陶器
109. 雍	115		武器，容器	

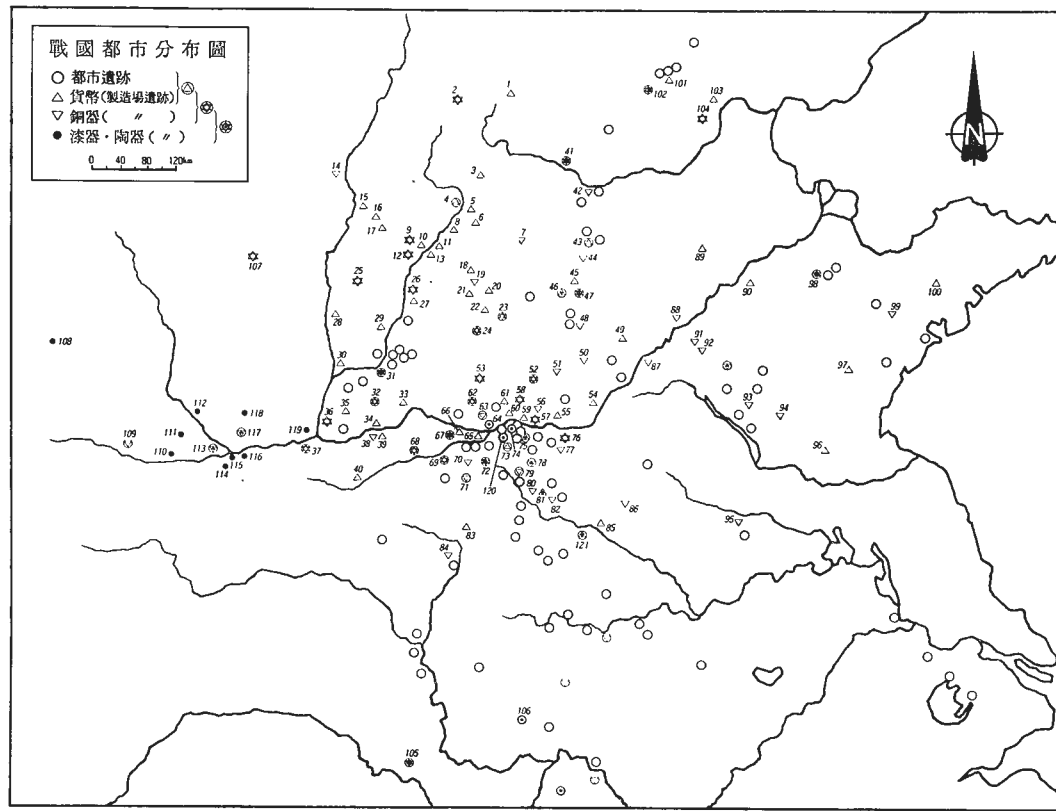
110. 美陽				陶器
111. 好時				陶器
112. 雲陽				陶器
113. 咸陽	116		武器	陶器(製作場), (鐵器製作場), 漆器
114. 杜縣				陶器
115. 芷陽				陶器
116. 麗邑				陶器
117. 櫟陽	117		武器	陶器, (鐵器製作場)
118. 頻陽				陶器
119. 臨晉				陶器
120. 格氏	47			陶器(製作場)
121. 陽城	69	方足布?		陶器, (鐵器製作場)

る。このような貨幣に鑄込まれた地名は、その貨幣を發行した都市を示していると考えられるが、これらすべてが都市の分布を考える材料として使えるわけではない。

問題の一つは銘文の読み方に異説があるものがあること、もう一つは、読み方に問題がなくても、地名の比定が困難なものがかなりあることである。たとえば、罽字を鑄込んだ方足布は、鄠と讀んで陝西省鄠縣とする説、豐と讀んで陝西省山陽縣とする説や、鑄(注)と讀んで河南省臨汝縣東南とする説などがある。<sup>(24)</sup>この貨幣は、前二者とすると秦のものとなり、後者とすると韓のものとなる。また、方足布々貝も読み方が大きく分かれる貨幣である。齊貝と讀んで齊の貨幣とする説、貝丘(沛丘)と讀んで山東省博興縣東南とする説、榆<sup>(25)</sup>と讀んで山西省榆次市とする説があり、さらに俞、文貝、丘貝などと讀む説もある。<sup>(26)</sup>このように、銘文の読み方に異説があるため地名比定が困難な貨幣はかなりの數にのぼる。<sup>(27)</sup>もう一つの、読み方には問題がないが地名比定が困難なものの典型的な例として「安陽」方足布がある。この貨幣について、鄭家相氏は「安邑の陽」と理解して山西省夏縣西北とするが、王毓銓氏は河北省臨城縣南とし、また山東省曹縣東とする説もある。<sup>(28)</sup>その他、文獻史料に同一地名が各地にいくつも現れる場合や、文獻史料に全く現れない場合も地名の確定は困難である。<sup>(29)</sup>

このように、貨幣の地名比定には多くの問題があるが、表二や圖二では、ま

圖二 戰國都市分布圖





ず読み方に問題がなく、地名比定にも異説がないものを中心に取り挙げた。そして、地圖上の位置は、地名考證のいきどいていと考えられる譚其驥主編『中國歷史地圖集第一冊』<sup>(30)</sup>の戰國部分を利用した。ただし、この地圖集に見られない地名でも、研究者による從來の地名比定に問題がないと思われるものは用いた。また、地名比定に異説があるものでも、妥當と思われる説は用いた場合もある<sup>(31)</sup>。

製造地名を刻した銅器に關して、三晉地域のものについて整理したものとしては、黃盛璋「試論三晉兵器的國別和年代及其相關問題」<sup>(32)</sup>があり利用できる。ここには、武器の製造地名として、韓では一一、趙では八、魏では一七挙げられており、さらに關連する貨幣、銅容器（銀器も含む）も附され、その製造地の位置も推定されている。表二と圖二の銅器に關しては、基本的にこれに依據した。ただし、地名が上述の貨幣と重なるものは、貨幣の地名比定に合わせた。なお黃氏の論文發表後に公表された材料で地名比定の可能なものは適宜追加した<sup>(33)</sup>。

なお、三晉地域以外の銅器で製造地名を記したものはあまり多くなく、齊と秦に例があるくらいである。秦について<sup>(34)</sup>は、新しい材料にもとづいて整理している佐原康夫氏の論考を參照し、齊については拙稿「戰國出土文字資料概述」<sup>(35)</sup>の齊の銅器の部分によった。

この他に、製造地名を記した器物としては漆器、陶器がある。これらは、主として前掲の拙稿を用いた。漆器に關しては、現在のところ、銘文から製造地名が知られるのは、78鄭、81許、113威（咸陽）、成（成都）のみであるが、これらはかなり大きな都市であつたと考えられる<sup>(36)</sup>。陶器に關しては、その出土材料は秦に片寄っている。これは、秦で陶器に製造地名を入れる習慣が一般化していたためとみられ、陶器製造地の分布を示しているわけではない。陶器の製造が都市でも行なわれたことは、都市遺跡内にその遺跡が存在することからも證されるが、製造地は必ずしも都市だけではなかつたと考えられる。陶器製造は、歴史的にみても、農村でも十分可能であつた。ただし、製造地名を入れてその品質の保證を行なっている點、かなりの大量生産が推定でき、これらの陶器製造地はある程度の規模の都市であつた可能性がある。このこ

とは、秦の場合を見てもその地名はほとんど秦漢時代に縣が置かれたところであることから推測できる。ただし、秦でこのような陶器の製造が始まるのは、考古學的にみて戰國末あるいは秦の天下統一以後のようである。<sup>(37)</sup>

以上、圖二「戰國都市分布圖」に用いた材料について検討を加えてきたが、ここでその分布傾向を見てみよう。一見してわかるのは、やはり河南省中央部に集中が見られ、しかも都市遺跡ともかなり重なり合っていることである。これによって、河南省中央部に都市の濃密な集中があったことはいっそう確實となったであろう。これに對して、河南省南部ではほとんど重なりは見られない。この地域は、戰國時代にはほとんど楚の支配下に入る地域であり、楚の支配のあり方とならかの關係があるように思われる。分布のもう一つの特色は、山西省南部の廣い地域に分布が廣がっている點である。とくに、汾水流域に分布が集中しており、しかもこれらはほとんど貨幣の發行地である。これらがどの程度の都市であったかは、都市遺跡とはほとんど重ならないため明らかでないが、貨幣發行を支えることのできるある程度の經濟力を有した都市であったとみなされる。

要するに、出土文字資料にもとづく都市分布は、都市遺跡の分布に比べて、その集中地域はかなり廣がるものの、中心部では密集し、周邊部ではまばらであるという構圖は變らない。河南省、山西省南部のいわゆる三晉地域には都市の密集が見られるのに對して、その周邊部ではそれほどではないのである。ただし、すでに述べたとおり、出土文字資料による都市の分布の推定にも様々な問題が存在し、以上の検討でも十全とは言えない。さらにこの推定を確かなものとするため、以下において文獻史料による検討を行なっておきたい。

### (三) 文獻史料による検討

すでに拙稿「戰國三晉都市の性格」<sup>(38)</sup>でもふれたとおり、三晉地域のある部分では、かなりの數の大都市を含む多數の都市が存在したことは、文獻史料によっても證することができる。すなわち、『史記』魏世家には、魏が安釐王の頃までに秦に奪われた縣の數は、「山南、山北、河外、河内の大縣數十、名都數百」であったとある。「山南、山北」とは山西省

南部の中條山の南北、「河外、河内」とは河南省内の黄河の南北を指すと考えられ、この時、魏都大梁以西の魏の領土内には、大都市が數十、その他名のある都市は數百もあったことになる。なお、魏地に鄰接する西周君の領土内については、宮崎氏が前掲の論文で、西周君が秦に對して「其の邑三十六、口三萬」を盡く獻じたという『史記』周本紀の記事から、その都市はせいぜい二、三百戸しかなかったとしている。しかし、これは西周君の領土というきわめて狭い範圍内のことにすぎず、一般化できないと思われる。

また、『史記』穰侯列傳にも、「穰侯、封ぜられて四歳、秦將となり魏を攻む。魏は河東の方三百里を獻ず。魏の河内を拔き、城大小六十餘を取る」とある。〈考證〉が言うように、この時、秦が取った城が「河内」の城であるとする、河南省の黄河以北の魏地には大小の都市が六十餘もあったことになる。

以上は、魏都大梁以西の都市の規模と分布を直接示す記事であるが、大梁以東については馬王堆出土帛書『戰國縱横家書』の第二六章に注目すべき記事がある。この章は、魏が大梁東南の鄆陵を秦に攻められた時、ある遊説家が魏の將軍田儼に對して行なつた獻策からなっている。遊説家はここで、「梁の東地、なお方五百餘里有り。而うして梁とともに千丈の城、萬家の邑たる大縣十七、小縣の市有る者三十有餘あり」と述べ、魏王に都大梁を退去して東方の單父に移つて反撃することを勧めている。これによると、大梁より東方の魏の領地内にはまだ、一邊が千丈（二五〇m）の城壁をめぐらし、一萬戸の人口を擁する大都市が一七、それ以外に市を有する經濟力のある都市が三〇以上もあったことになる。ところが、上述の圖二「戰國都市分布圖」では、76梁（大梁）より東の地は全く空白となっている。これは、『戰國縱横家書』の誤りではなく、遺跡が未發見なだけであると考えられる。歴史上、黄河はしばしば河道を變え、現在の開封市のある大梁のあたりで東南方へ流出していたことが幾度かあった。<sup>(42)</sup>北宋の首都開封は現在の開封市の下にあり、戰國時代の大梁はさらにその下にあつて、その深さは一〇mを越えると考えられる。<sup>(43)</sup>大梁は、黄河の氾濫による土砂の下に完全に埋まつており、その形態さえわからない。この地域の他の戰國時代の都市も、厖大な土砂の下に埋まり、現在地表には全く痕跡が

残っていないのも當然であろう。『戦國縦横家書』の記事を加味すれば、都市分布の濃密な地域は、河南省の中央部のより東方にも廣がつていたと考えられる。

次に、三晉地域以外における都市の規模と分布はどのようであつたであらうか。三晉地域のような直接的な記事はないが、間接的な史料はいくつかある。齊については、宮崎氏が前掲論文で用いている『史記』樂毅列傳の記事がある。前二八四年、燕の將軍樂毅が齊都臨淄を陥した後のこととして、「樂毅は留まりて齊に徇うること五歳、齊の七十餘城を下し、皆郡縣となして、以つて燕に屬せしむ。ただ獨り莒と即墨とのみまだ服さず」とある。樂毅は、燕軍を率いてまたたくまに七〇以上の齊の城を占領し、抵抗を續けたのは莒と即墨という二都市のみであつた。<sup>(44)</sup>だが、この後、齊の將軍田單は抵抗を續けていた即墨に據つて燕軍を破り、またたくまに奪われた七〇餘城を回復してしまつた。宮崎氏は、この記事にもとづいて、「齊の領土の七十餘城というものは全くあれども無きが如く、ただ順應して去就を定めるのみで、それ自身何等の獨立性を有しないように見えるが、事實においてそれは人口も少なく、富力も貧弱で、軍隊もおかれぬ單なる農業都市で、甚だ無力な存在であつたであらう」と述べている。氏は、これを戦國都市の一般的性格とみなしているが、齊に限つた場合のみ妥當であらう。

これと同じような齊の状況は、『戦國策』趙策三にみえる先の田單と趙の將軍趙奢との會話にもうかがうことができ、田單は齊を回復した後、趙の恵文王三〇年（前二六九）、齊を出て趙の宰相となつた。そこで、彼は趙奢に兵法について議論をふっかけた。

單、之を聞く。帝王の兵は、用うる所の者三萬に過ぎずして天下服せり、と。今、將軍は必ず十萬、二十萬の衆を負うて乃ち之を用う。此れ單の服せざる所なり。

これに對して、趙奢は、田單の論が兵法に通達してないだけでなく、今の時勢もわかつていないとして反論する。

古は四海の内分かれて萬國と爲る。城は大といえども三百丈を過ぐる者なく、人衆きといえども三千家を過ぐる者な

し。而うして集兵三萬を以って此を距ぐ。なんぞ難からんや。

と述べ、さらに、

今、千丈の城、萬家の邑相望むなり。而うして三萬の衆を以って千丈の城を圍まんことを索むるも、その一角をも存せずして野戦にも用うるに足らず。君將に此を以って何にか之かんとす。

この議論は、古と今との比較としてなされているが、實際にはともにそれぞれの現状認識にもとづいていとみなしてよい。田單はもと齊の將軍として齊の現状を、趙奢は趙の將軍として趙を中心とする三晉地域の現状を踏まえていると考えられる。とくに、田單の認識には、先に少數の兵で燕の占領軍を撃破した實戰經驗が大いに影響していたと考えられるであろう。齊では七〇以上の城壁を持った都市があつたが、それは「あれども無きが如」き小都市に過ぎなかつたため、三萬程度の軍隊でも勝利は可能であつたのである。やはり齊では一部、臨淄や即墨など經濟力を有する大都市も存在したが、大部分は未發達な小都市に止まっていたと考えてよいであろう。<sup>(45)</sup>それに對して、三晉地域では「千丈の城、萬家の邑相望むなり」とあるが、これは前節で述べた狀況と全く合致している。

以上のような他國の領土の迅速な占領という點に注目すれば、その他にもいくつかの事例を擧げることができる。その一つは、上述の燕が將軍樂毅をして齊を攻めさせる遠因となつた事件である。前三一六年、齊は燕の内亂に乗じてその國都を占領したが、その占領はきわめて速やかであつたようである。<sup>(46)</sup>それは、燕の齊と國境を接する地域には、齊の軍に抵抗できるほどの都市がなかつたためであると考えられる。また、春秋時代末に溯る例であるが、吳が楚都郢を占領した場合も同様であろう。『春秋』定公四年の條によると、吳は柏舉で楚を破つた後、十日で楚都を陥している。<sup>(47)</sup>吳がこのように迅速に行動できたのは、一つには楚都の東面には吳の背後を突くことができるほど有力な都市があまりなかつたことを示していると思われる。

この他、他國の占領ということと都市の關係で興味深いのは、秦の天下統一の過程である。秦は東方進出に際して都市

の抵抗をしばしば受けているが、ある程度まとまった廣さの占領地の支配が可能となった場合には郡を置いてあるようである。<sup>(48)</sup>この置郡の過程を見れば、その占領地の支配の困難さの程度がわかり、ひいては占領地における都市の發達の程度も推測できると考えられる。有力な都市が多くあればあるほど、常識的に考えて占領地の支配は容易でなかったと考えられるからである。現實に、趙氏の本據であり、相當の大都市であった晉陽は、智伯とその同盟の韓氏、魏氏の大军に包圍されながらも一年餘りたつても陥ちなかった。<sup>(49)</sup>また、上述の齊の莒や即墨なども(表二のごとく、ともに貨幣を發行することができた經濟力を有する都市であった)、燕軍に攻圍されながらも數年間も持ちこたえていたのである。<sup>(50)</sup>

さて、秦の置郡年次については、楊寬氏の新版『戰國史』<sup>(51)</sup>の附録一、戰國郡表(六)に秦國設置の郡の一覽表があり利用できる。また、馬非百『秦集史(下)』<sup>(52)</sup>の郡縣志でも、主として譚其驥氏の説を参照しながら秦の置郡年次が考證されている。この兩氏の説には多少の異同があるが、基本的な點では大差ないので、ここでは楊氏の説によって秦の置郡過程を見ていきたい。

秦の置郡過程は、前三一七年に巴郡を設置して以後、<sup>(53)</sup>前二二一年に天下を統一するまで大體四期に分けることができる。まず、第一期は前二七一年までで、秦の本據地である内史の周邊から南方、東南方に置郡される時期である。とくに、東方に對しては、前二九〇年に河東郡が設置されて以後、<sup>(54)</sup>その東に置郡されることはなく、かえって東南方に南郡(前二七八)、南陽郡(前二七三)が設置されている。これは、ちょうど三晉地域を避けて東南方に迂回した形になっている。そして、その後、前二七一年に北地郡が設置された後、前二五〇年まで長期にわたって安定した郡は設置されていない。<sup>(55)</sup>これが第二期である。秦は、この時期にも頻繁に東方の三晉地域に進出し都市を占領しているが、安定した支配を維持することができなかったと考えられる。第三期は前二四九年から前二二六年までで、三晉地域の置郡が進む時期である。この間には、三川郡(前二四九)、上黨郡(前二四七)、東郡(前二四二)、潁川郡(前三三〇)、邯鄲郡(前二三八)など三晉地域の中心部の郡と、その北方の郡があわせて八つ設置されている。ただし、これだけの郡が設置されるまで二四年間かかってい

る。最後の第四期は前二二五年から天下を統一する前二二一年までのわずか五年間である。この間には、齊、燕、楚を滅ぼし、一六もの郡が設置されている。

まず、第一期の東方を迂回しての東南方への進出は、三晉都市の抵抗によって東方への進出をはばまれ、大都市が少なくて抵抗のより少ない地域に進出せざるをえなかったことを示している。次の第二期の置郡の空白期は第一期の延長と推測される。秦は三晉地域の奥深く進入するものの、多数の大都市の抵抗をうけて、ある程度まとまった領域を安定的に支配する郡を設置することができなかったと考えられる。そして、第三期になってようやく三晉地域に置郡されるようになるが、それが完成するまで四半世紀近くかかっており、やはり三晉地域の都市の抵抗の強さをうかがうことができる。ところが、秦はこの三晉地域を突破してその置郡を完成させると、その東方の齊、燕、楚の領域の置郡のスピードは急速に高まり、一擧に天下統一へとつき進む。これは、もちろん支配地域の擴大に伴って、国力、軍事力が急激に高まったことにもよると考えられるが、齊、燕、楚の領域に長期にわたって抵抗できるほどの大都市があまりなかったことにもよると思われる。このように、やはり秦の置郡の過程を見ても、置郡がなかなか進まなかった三晉地域には大都市が多数發達していたと推定されるに對して、置郡が容易であったその周辺の齊、楚の領域には都市の發達がそれほどではなかったと考えられるのである。

最後に、秦自體については、商鞅の第二次變法で行なわれた大縣の設置の仕方が参考になる。『史記』秦本紀には、

諸の小郷聚を并せ、集めて大縣と爲す。縣に一令、四十一縣あり。

とある。これは、商君列傳では「小都郷邑聚を集めて縣と爲し、令丞を置く。凡そ三十一縣なり」とあり、六國年表では「初めて小邑を取りて三十一縣を爲る」となっている。いづれにせよ、小集落をいくつかあわせて行政單位としての縣を設置したものと考えられる。<sup>(57)</sup> そうすると、置縣の行なわれた地域では單獨で縣を設置できるほど大きな都市が存在しなかったことになる。この時の置縣がどの地域で行なわれたか明らかなでないが、秦ではかなり廣い範圍にわたって目立つほど

の都市がなかったのではなからうか。

#### (四) 都市發達と交通路

以上によって、戰國時代を中心とする時代には、都市發達の程度の異なる二つの地域が存在することが明確になった。すなわち、三晉地域では、巨大都市がかなり密集して發達したのに對して、その周邊地域では、國都は巨大であるものの、一般的な地方都市の發達はそれほどでもなかったのである。

では、なぜ三晉地域に限って巨大な都市が多數發達したのであらうか。結論から言えば、それは商業交通路の發達と大いに關係があつたと考えられる。『史記』貨殖列傳には「陶は天下の中、諸侯四通し、貨物の交易する所なり」とあり、ここを據點に大商人が活躍したとされている。戰國時代において、山東省の河南省寄りの地域は交通路の集まる世界の中心地で、陶という商業都市が發達していたことは間違いないであらう。宇都宮氏は、この陶やその東北方の衛は、東西、南北の大幹線水路が交わるところに發達した世界的大都市であつたとしている。<sup>(58)</sup> 史念海氏も、戰國時代に陸路、水路の交通の要衝に多くの經濟都市が發達したことを認めているものの、水路交通によって發達した「天下の中」としての陶をとりわけ重視している。<sup>(59)</sup> さらに、伊藤道治氏も、齊と晉の會盟地の検討をもとに、これらの都市を含む曹、宋、衛の接壤する地域は、すでに春秋時代において東西、南北の交通路が交叉する商業交通の中心地であつたとみなしている。<sup>(60)</sup> これによって、確かに河南省東部から山東省西部にかけての地域に交通路の中心地が存在し、商業都市が發達していたことが確認できるが、この地域はこれまで論證してきた都市發達の顯著な地域の一部にすぎず、あまりにも東邊に片寄りがすぎていると言わねばならない。それでは、それ以外の三晉地域の都市發達は、商業交通路の發達という經濟的な要因とは關係なかったのであらうか。この點に關して、直接證明する材料は現在のところ見出しえないが、前後の時代から推測できるのではないかと考える。

前の西周時代の交通路については、伊藤道治氏が『春秋左氏傳』にもとづく姬姓諸侯の配置および西周時代の考古學的



遺跡の分布の検討から論じている。<sup>(61)</sup>氏は、周の姫姓諸侯の封建は重要な交通路を確保することが一つの目的であったとみなし、これらの諸侯は交通路に沿って配置されたことを明らかにしているのである。すなわち、周は本據地の渭水流域を起點として東方に進出するが、まず山西省南部に姫姓諸侯を配置する。そして、そこから汾水を溯る方向と黄河を下る方向に向かう。黄河を下った河南省中央部には多數の姫姓諸侯が封建され、この地域は東方支配の根據地となる。周は、この地域を起點としてさらに北方、東方、東南方に姫姓諸侯を配置しながら進出したとしている。そうすると、西周時代においては、重要な交通路が分岐する中心地域として山西省南部、河南省中央部が注目される。この地域はまさに戰國時代<sup>(62)</sup>に都市が発達する地域そのものと言ってよい。

一方、後の前漢時代については、『史記』貨殖列傳に注目すべき記事がある。司馬遷は、「昔、唐人は河東に都し、殷人は河内に都し、周人は河南に都す。夫れ、三河は天下の中にありて鼎足の若し。王者の更も居る所なり」と述べ、三河の地域を中心に、同時代における全國各地に通じる主要な交通路とそれに對應する地域の社會的、經濟的特色について記している。<sup>(62)</sup>司馬遷の時代においては、三河、すなわち山西省南部の河東、河南省の黄河以北の河内、黄河以南の河南省中央部の河南は、四方の交通路が集中する商業經濟の中心地として認識されていたのである。<sup>(63)</sup>この地域も、戰國時代に都市が発達した地域とほとんど重なっている。

要するに、春秋、戰國時代の前後の時代、すなわち西周時代と前漢時代において、重要な交通路の中心地は、戰國時代に都市が発達した地域とほとんど重なっているのである。交通手段に大きな變化がなかったと思われる古代において、重要交通路の中心地が容易に移動したとは考えられず、<sup>(64)</sup>戰國時代に交通路の中心地が東邊に片寄っているように見えるのも、現存史料の片寄りによるためと考えられる。また、春秋時代における伊藤道治氏の推測も、齊と晉を中心とした會盟地に限定してなされたものであり、他に交通路の中心地があったことを必ずしも否定するものではない。したがって、戰國時代の三晉地域を中心とする都市の發達は、やはり經濟的な要因が大きく係わっていたと考えて大過ないのではなから

うか。ただし、なぜ戦國時代を中心とした時代にこの地域に都市が発達したかについては、別にその要因を考える必要が(65)あろう。

ともかく以上によって、宇都宮氏と宮崎氏の都市論は、それぞれ一面で正しく、一面で不正確であると言うことができ(66)る。三晉地域に限って見れば宇都宮氏の考えが妥當であるが、その周邊地域については宮崎氏の考えも一概には否定できないように思われる。では、それぞれの地域ではいかなる都市支配が行なわれたのであろうか。それぞれの地域の都市の性格をよりいっそう明確にするためにも、この點を明らかにしておく必要があろう。

### 三 戦國諸國家の都市支配

#### (一) 三晉地域の諸國家

まず、經濟的な要因によって都市が発達したと考えられる三晉地域の諸國家、すなわち韓、魏、趙における都市支配のあり方について見ていきたい。これらの國々の都市支配の一般的あり方を推測するには、先に分布と規模の検討に用いた出土文字資料が参考になる。すでに述べたとおり、三晉地域の各都市はそれぞれ銅器や貨幣、陶器などを製造していたが、それらは一方では各國の都市支配のあり方(66)を示しているのである。

この點は銅兵器と貨幣において顯著に認められる。三晉地域で製造された銅兵器には、その製造の責任を明らかにするため、製造監督者名と製造者名を刻したものがかなりの數知られている。たとえば、近年、河北省臨城縣で出土した銅戈(67)には、「二年、邢令孟束慶、□庫工師樂參、治明執劑」の刻銘がある。「邢令孟束慶」とはこの戈の製造監督者、「□庫工師樂參」は製造現場の責任者、「治明」は實際に製造した工人とみなされる。(68)したがって、この戈は、趙に屬したと考えられる邢縣において、その長官である令の責任によって製造されたものと考えてよい。三晉地域で製造された銅兵器には、この他、中央政府の官が製造監督者となっているものも存在するが、縣令が製造に係わっているものについては、縣

令より上位の官名が刻されている例は見當たら<sup>(70)</sup>ない。すなわち、縣の製造に係る銅兵器の最高統轄者は縣令に留まり、それより上位の官は關與していないのである。これは國都の場合でも同じで、國都を縣として統轄する令が中央政府とは獨立して銅兵器を製造している。したがって、三晉地域の國々では例外なく、縣、すなわち都市は獨自の銅兵器製造機構を有し、縣<sup>(71)</sup>都市の最高統轄者である令によって統轄されていたと言ふことができる。そして、このことはとりもなおさず、三晉地域の縣<sup>(72)</sup>都市が中央政府から軍事的に獨立した存在として認められていたことを示している。

貨幣についても、その鑄造、發行が都市を單位としていたことは明白である。上述のように、三晉地域で主として發行されたと考えられる尖足布には三一種類、方足布には六六種類の地名が認められ、その他鄭家相氏の書によると、橋形方足布一七種類、圓足布七種類、三孔布一の種類、圓孔圓錢一〇種類、直刀錢五種類の地名が見える。これらの地名には重なるものもあるが、三晉地域では非常に多くの都市が貨幣を鑄造、發行していたことがわかる。そして、貨幣の銘文からは、その發行がより上位の郡や中央政府に統轄されていたことをうかがわせるような形跡は認められないし、また排他的に流通した國家による統一貨幣も存在しなかつたようである。<sup>(73)</sup>したがって、國家の統制を受けず獨自の貨幣を發行することのできた三晉地域の都市は、中央政府に對して軍事的に獨立してただけでなく、經濟的にも獨立した存在であつた可能性が強い。

しかし、一方では、三晉地域の都市は、上位權力の統制を全く受けない、制度的に完全に獨立した存在であつた<sup>(74)</sup>とい切れることもできない。これらの都市は、現實に縣に編成され、その長官である令は王によって任命される直轄地であり、またその縣を統轄する郡も置かれていたのである。とは言ふものの、中央政府がこの制度によって都市の獨立性を奪つて完全に從屬させることを意圖したとはいひ切れることもできない。このうち郡については、三晉地域では主として邊境の防衛のために置かれ、軍事的にま<sup>(75)</sup>とまつて敵國の攻撃に對處することが主眼とされていて、中央政府の統制という側面はそれほど強くなかつたと考えられる。それでは一方、縣<sup>(76)</sup>都市一般に對する中央政府の現實の支配のあり方はどのようなであ

ったのであろうか。この點については、中央政府の施策面から検討してみたい。

魏は文侯の時、李悝を相として國政の改革を行なつたと伝えられている。李悝は「盡地力之教」によって農業生産の増加をはかり、『法經』を制定して秩序維持をめざしたが、この他に「平糶法」という施策を行なつたと言われる。『漢書』食貨志上に李悝の言として、

糶甚だ貴きは民を傷ない、甚だ賤きは農を傷なう。民傷なわれば離散し、農傷なわれば國貧し。故に甚だ貴きと甚だ賤きは其の傷なうこと一なり。善く國を爲むる者は民をして傷なわしむることなくして益々勤ましむ。

とある。そして、ついで國家が年の豊凶にもとづいて、穀物を買入れたり賣り出したりして穀價を安定させる方策を具體的に述べている。李悝のこの「平糶法」は、基本的には農民保護の上に立つてなされたものであり、商人の投機的活動を抑制する方向にあるが、農民以外の「民」をも配慮していることに注目される。この「民」について、韋昭は「土・工・商なり」と注しており、基本的には都市住民を指すと考えられる。國力の基礎として農業を重視する李悝にあつても、都市住民の存在は無視できなかったのである。あるいは、むしろ國力のもう一つの基礎として保護されるべきものと認識されていたとみなしてもよいかもしれない。

魏においては、この後、恵王の相となつたとされる白圭<sup>(78)</sup>などは、明らかに重商主義的立場に立っている。『史記』貨殖列傳によると、

白圭は事變を觀るを樂しむ。故に人棄つれば我取り、人取れば我與う。夫れ歲孰すれば穀を取り、之に絲漆を予え、繭出づれば帛絮を取り、之に食を予う。

とあり、さらに「時に趨くこと猛獸摯鳥の發するが若し」とあつて、時期を見て敏速に賣買することの重要性を述べている。これはまさに投機的商業の手法であり、白圭は實際に商人出身であつた可能性もある。<sup>(79)</sup>このような立場の人物の施策が都市の商人に對して抑壓的であつたとは考えがたい。あわせて、この恵王の時には、孟子が王に自給自足的な農業政策

を説いて退けられていることも考慮すべきであろう。<sup>(80)</sup>これらの點から、魏は自由な商業活動を容認する方向にあり、決して縣<sup>II</sup>都市の獨立性を否定することはなかったと考えられる。

魏以外の韓、趙については、その縣<sup>II</sup>都市支配に直接係わると思われる施策に關する史料は見出すことはできず明確なことは言えない。ただし、韓においては、昭侯の相となった申不害が中央集權的な君主專制體制をおし進めたとされてお<sup>(81)</sup>り、都市に對する統制も強められたことが一應考えられる。しかし、申不害は君主の意圖を臣下にさとらせない「術」を

重んじたと言われ、また司馬遷は「申子の學は黃老に本づきて刑名を主とす」とも述べている。<sup>(82)</sup>司馬遷の生きた漢代において、「黃老」の政治とは上の者が政治の大體を把握するのみで、下の者に干渉しないことをモットーとしたとされる。<sup>(83)</sup>

この「黃老」政治と「術」的態度は通じるところがあり、申不害の政治が都市に積極的に干渉するものであったかどうかは疑問である。また、拙稿「戰國三晉都市の性格」において述べたように、<sup>(84)</sup>韓の上黨郡の吏民が都市を強く統制しようとする秦の支配を拒絶して趙に降った事件などから見ても、兩國とも縣<sup>II</sup>都市を強力に統制しようとする體制はとっていなかったと考えられる。

要するに、三晉地域の諸國家は、確かに都市を縣に編成して官僚制的に支配していたが、その獨立性を認めた上での支配であったと考えられる。これは、都市の經濟的實力によつて規定された支配のあり方と考えられるが、これらの都市が中央派遣の官僚以外に獨自の權力を生み出し、自治都市化しえなかったことも事實である。經濟的に發達した都市が、なぜ官僚制化して行くのか大きな問題であるが、これは官僚の性格との係わりの中で改めて考察すべき問題であると考え<sup>(85)</sup>る。

## (二) 周邊地域の諸國家

三晉地域の周邊の諸國家、すなわち齊、燕、楚、秦などの諸國の都市支配のあり方についても出土文字資料が參考となる。注目されるのは、これらの諸國の中央政府の都市に對するあり方に共通した點が認められることである。<sup>(86)</sup>すなわち、

銅兵器、貨幣を見ても、三晉地域の諸國ほど顯著に都市が獨立してその製造、發行に關與していたとは考えられないのである。むしろ、これらの諸國の都市は中央政府に對してかなり隸屬的であつたように思われる。

齊でも、地方都市が獨自に銅兵器を製造していたことは確認できるが、その事例は三晉地域の國ほど多くない。貨幣に至つては、都市獨自の發行と考えられるものは、「節鄆」「安陽」「譚」「齊」の地名を冠する刀錢四種類が知られるのみであり、しかも「齊」字を冠するもののうち、最後に出現するとされる「齊法化」銘の刀錢は國家發行の統一貨幣と考えられている。このことから、齊では貨幣を發行できるほどの經濟力のある都市はもとと少なく、その貨幣發行權も最終的には國家に奪われてしまったようである。燕では、現在のところ、王や官府に統轄されて製造された銅兵器は知られているが、明らかに地方都市製造と考えられる例は發見されていない。貨幣については、「益昌」「襄平」「旬陽」「平陰」など地方都市が發行したと考えられる方足布が少數知られるが、國家による統一貨幣とみられる「明」字樣刀錢が大量に流通している。楚においては、銅兵器には有銘のものが乏しくなんとも言えない。ただし、貨幣については、「陳爰」「專爰」「郢爰」「𥇙」「盧金」金版など地方都市發行と考えられるものもいくつか存在する。しかし、これらの發見例はきわめて少なく、國都で發行された「郢爰」金版や蟻鼻錢が大量に流通しており、これらが實質的な國家の統一貨幣であつた可能性がある。楚でも、都市の經濟的獨立性は否定される傾向にあつたとみなすことができる。

三晉地域の諸國ととりわけ對照的なあり方を示しているのは秦の場合である。拙稿「戰國三晉都市の性格」で詳述したように、<sup>(87)</sup>銘文から見て銅兵器の製造は實際に縣<sup>(88)</sup>都市で行なわれていても、その最高統轄者は縣令ではなく、より上位の相邦（あるいは丞相）や郡守であつた。また、地方發行の貨幣も見出されず、統一貨幣としての半兩錢が廣く流通している。秦においては、都市の軍事的、經濟的な獨立性を否定して、上位の權力に從屬させようとする傾向がとりわけ強かつたと言ふことができる。

以上のごとく、銅兵器や貨幣の銘文を見る限り、周邊地域の諸國家は、三晉地域の諸國家に比べて、地方都市を統制

し、從屬させようとする傾向が強いように見うけられる。そこで、この點をより明確にするために、ここでも各國の施策面から検討しておきたい。

まず、齊について見ると、『史記』田敬仲完世家に次のような威王の地方官統御に係わる話が記されている。威王は、即位すると政治を卿大夫にまかせきりにしたため、九年の閒まわりの諸侯に攻められ、國內も大いに亂れた。ところがあつた時、威王は覺醒し、即墨大夫を召して次のように告げた。

子の即墨に居りてより毀言日々至る。然れども吾れ人をして即墨を視しむれば、田野闢らけ、民人給し、官に留事なく、東方以て寧んず。是れ子の吾が左右に事えて以て譽を求めざればなり。

威王は、この即墨大夫を一萬家に封じた。ついで阿大夫を召して告げた。

子の阿を守りてより、譽言日々聞す。然れども使をして阿を視しむれば、田野闢らけず、民は貧苦す。昔日、趙の甄を攻むるも子は救わず、衛の薛陵を取るも子は知らず。是れ子の幣を以て吾が左右に厚くし、以て譽を求むればなり。

威王は即日、この阿大夫と彼を譽めた側近とともに烹殺してしまった。そして、ついに軍を動かして周圍の國々に攻め込み、打ち敗った。そこで、齊の人々は懼れおののき、齊國は大いに治まったとされている。ところで、滑稽列傳では、この部分は「諸縣の令長七十二人を朝し、一人を賞し、一人を罰す」となっている。この時、齊國の全縣の長官が召集され、彼らの面前で王自らによって即墨と阿の長官の賞罰が行なわれたと考えられる。ここからは、齊王が全地方官の治績を直接掌握し、さらにその賞罰を明確にすることによって、きびしい統御を行なおうとしていることが讀み取れる。齊ではやはり、地方の縣をその長官を通じて中央集權的に掌握することが意圖されており、當然、縣の置かれた都市も王を中心とする中央政府の強い統制下に置かれていたと考えられる。ただし、この中央集權化がどこまで徹底したか疑問とする考えも存在する。<sup>(89)</sup>

燕については検討に値する材料を見出すことができないが、楚については、悼王の令尹となった吳起による改革が問題となる。吳起の改革については不明な點が多いが、改革の重要な目的の一つは世族勢力を抑えて王權を強化することにあつたとされている。<sup>(90)</sup>楚でも、中央集權的な支配の確立がはかられ、それとともに縣<sup>二</sup>都市の統制も強められたことが豫想される。しかし、この改革は世族勢力の反撃によって吳起が殺されたことにより、それほど徹底しなかったと考えられる。

最後に秦について見てみよう。秦についてはやはり、孝公の時の商鞅の改革が問題となる。この改革は多岐にわたっているが、縣<sup>二</sup>都市の支配に直接關係するのは、先にふれた、小集落（小都市も含むと考えられる）をいくつかあわせて縣という行政單位を設置した點である。この縣による支配は、上から行政的、人爲的に各集落を統制しようとするものであり、個々の集落の獨自性は全く考慮されていない。また、この改革の基調は農業に置かれており、都市住民に對する施策が全くないだけでなく、逆に都市の重要な構成員と考えられる商工業者に對する抑壓が行なわれている。『史記』商君列傳には、

大小力を僇わせ、耕織を本業とし、粟帛を致すこと多き者は其の身を復す。末利を事とし、及び怠けて貧なる者は擧げて以て收孥と爲す。

とあり、明らかに「重農抑商」の立場に立っている。商鞅の改革は、都市支配に關して見る限り、都市の獨立性を否定し、強く統制しようとする方向にあったと言つてよいであろう。

ただし、莊襄王の時から秦王政の初年にかけての時期は、陽翟の大商人であつた呂不韋が丞相、相國となり、秦でも商工業を重視する傾向が生じたとされている。<sup>(91)</sup>このことは、秦の本據地である内史を中心とした地域の問題として考えるべきではないであろう。秦は、この時上述のように三晉地域の奥深く進出し、多くの都市をその支配下に置いている。そして、この呂不韋が丞相となると同時に置郡が進行している。このことから、秦の商工業に對する方針の轉換は、三晉地域



における都市支配の進展と関係があると考えられるが、この時いかなる都市支配が行なわれたかは明らかでない。

以上、要するに、周邊地域の諸國における、その本来の支配地域の都市支配のあり方は、それがどれだけ徹底されたかは別として、一般に中央政府が強力に統制しようとする傾向が強かったとみなして差し支えないであらう。

#### 四　　す　　び

以上によって、戦國時代には都市發達の程度の異なる二つの地域が存在したことはもはや疑いはないであろう。この時代、黄河中流域を中心とする三晉地域には巨大な都市が多數發達していた。この地域は古くから重要交通路が集中していた地域であり、宇都宮氏がすでに指摘しているように、その發達は經濟的な要因によるところがきわめて大きかったと考えられる。都市は、そのような經濟的な實力を背景に、その軍事的、經濟的な獨立性を獲得していったのである。そして、國家による支配もその強力な抵抗を受け、その獨立性を容認せざるをえなかったと考えられる。これに對して、三晉地域の周邊地域では、國都は別として、都市は概して小さく、またそれほど密集して發達してはいなかった。こちらの方は、宮崎氏の指摘どおり、都市の多くははまだ未發達な農業都市の段階に止まっていたとみなしてよいかもしれない。この地域では、國家による支配も強力な抵抗を受けることは少なく、中央集權的な支配を行なうことが可能であったと考えられる。言い換えれば、中央集權的な專制支配は都市の未發達な地域で發達したと言うことができる。そして、このような支配を最も徹底して行なったのが秦であった。

秦は、天下を統一した後も、中央集權的な都市支配を全國的によりいっそう推し進め、都市の獨立性を根本から否定するに至る。すなわち、秦は天下統一と同時に、支配地域全域に郡縣制を施行するとともに、都市の獨立性の象徴とも言える城壁を破壊し、その銅兵器鑄造權をも奪っている。<sup>(92)</sup>そして、また天下の豪富者を咸陽に強制的に移住させ、首都の經濟力の増強をはかる一方、地方都市の經濟力の削減をはかっている。<sup>(93)</sup>さらに、始皇帝の三三年には、逃亡人や贅増とともに賈

人を南方の地に強制的に送り込んで新しい郡の設置を行なっている。<sup>(94)</sup> これも、都市の経済力の弱体化が一つの重要な目的ではなかったかと思われる。

しかし、秦のこのような強引な中央集権的都市支配も始皇帝の死とともに破局を迎える。早くも二世皇帝が即位した年、陳勝が舉兵すると、それに呼應して郡縣の少年たちが都市を支配する太守、縣令を殺して自立し始めるのである。<sup>(95)</sup> そして、この混亂を最終的に收拾して成立するのが漢王朝である。この漢王朝は、もはや秦とは同じ道を歩まず、都市の發達を容認するような立場を取っている。漢王朝は、三晉地域の發達した都市を安定的に支配するためには、どうしてもこのような立場を取らざるをえなかったのではないかと考えられる。

まず、漢の高祖劉邦は即位の六年に、秦によって破壊された都市の城壁の修復を命じている。<sup>(96)</sup> これは、漢王朝が都市の存在意義を認めたことを示しているであろう。ただし、高祖は、商人に對しては「商賈の律」を發布し、なおかなり差別的な對應をしている。<sup>(97)</sup> しかし、この律も惠帝、呂后の時代になると弛められ、<sup>(98)</sup> さらに以後武帝の初年まで、政治思想として黄老思想が流行し、<sup>(99)</sup> 統制よりも自由放任の政治が理想とされるようになる。そして、文帝の時代には、民間で自由に貨幣を鑄造することさえ許されている。<sup>(100)</sup> 『史記』平準書には、武帝が即位した當初のこととして、

都鄙の廩庾皆滿ちて而して府庫貨財を餘す。京師の錢巨萬を纍ね、朽ちて校う可からず。

とあり、經濟の活況のさまをうかがうことができる。都市も、このような狀況のもとで發展し續けていたと考えられる。しかし、この武帝の時、對外的な膨脹政策による財政の破綻によって、以上のような自由放任的な政治も方向轉換をせざるをえなくなる。『史記』平準書によると、この時、財政再建のための算緡令や告緡、さらに鹽鐵の專賣化などが行なわれ、都市の商人は沒落を餘儀無くさせられていく。漢代における、都市の縮小、衰退は、直接的にはこうした抑商政策によると考えられるが、中央集権的な帝國の存在自體の中にもその要因は内包されていたと考えられる。ジェーン・ジエイコプス女史によると、歴史的に見て、中央集権的な帝國一般の政策と取引は、繁榮する都市から富を一方的に吸い

上げることによって、都市の衰退をもたらし、ひいては帝國自體の没落をもたらすとしている。<sup>(101)</sup>したがって、漢代における都市の縮小、衰退も、この時代の都市の經濟的基盤の脆弱性によるとは、必ずしも言えないのではないかと考えられる。

## 註

- (1) 『漢代社會經濟史研究』（一九五五、弘文堂書房）。
- (2) 服部克彦『古代中國の都市と周邊』（一九六二、ミネルヴァ書房）など。
- (3) 一九五五、上海人民出版社、頁九七。新版は一九八〇年に同じ出版社から出ているが、都市に関する考えは變っていないようである。
- (4) 「中國古代都城規劃的發展階段性——爲中國考古學會第五次年會而作」（文物一九八五——）。
- (5) 「論戰國城市的發展」（遼寧大學學報一九八二——）。また、同氏は『春秋戰國城市經濟發展史論』（一九八八、遼寧大學出版）でも、都市發達の經濟的要因を重視しているが、一方では國家による管理がその經濟的發展を抑えたことも強調している。
- (6) 黃以柱「河南城鎮歷史地理初探」（史學月刊一九八一——）、「張南、周伊「春秋戰國城市發展論」（安徽史學一九八八——）など。
- (7) 『東方學會創立十五周年記念東方學論集』（一九六二）。なお、この論文は『アジア史論考（中）』（一九七六、朝日新聞社）に再録。
- (8) 「先秦時代の都市」（研究三〇、一九六三）。
- (9) 「中國古代における都市と商工業」（『中國古代の商工業と專賣制』、一九八四、東京大學出版會）。
- (10) 「中國古代聚落の展開」（歴史學研究別冊特集『地域と民衆』、一九八一）。
- (11) 「城市の形成と中央集權體制」（歴史學研究別冊特集『民衆の生活・文化と變革主體』、一九八二）。
- (12) 「戰國時代の府・庫について」（東洋史研究四三——、一九八四）。
- (13) 名古屋大學文學部研究論集XCV（史學三二）、一九八六。
- (14) 報告書の内、主要な雜誌は以下の號まで用いた。文八九——、考八九——三、考學八八——四、中原八八——四、考與文八九——、江漢八九——一、文博八九——一、夏華八八——四、內蒙四（一九八六）など。なお、この表には圖一「戰國都市遺跡分布圖」からはみ出す遺跡は擧げていないし、また10と25の城址群は一つの遺跡としてあつかった。
- (15) 陳城遺址は周長四五〇〇m（河南）、季家湖古城は一四〇〇×一六〇〇m（江漢八〇——二）、白店古城は八〇〇×一〇〇〇m（侯馬盟書）。

- (16) 漢魏故城は三七〇〇×四二九〇m (文博八八一)、宛城は周長八二〇〇m (河南)、曲阜漢城は二五六〇×一八八〇m (魯故城)、漢長安城は六二五〇×五九四〇m (考與文八一)、長陵邑は二〇〇〇×二〇四〇m (考八七一)、丹鳳縣古城は二〇〇〇×六〇〇m (考與文八一三)、右北平郡址は二五〇〇×二〇〇〇m (文八五一四)、雒城は二四〇〇×一八〇〇m (第五次年會)。

(17) 註(8)論文。

- (18) たとえば、52鄭州商城の周邊では、一邊一km以上の都市遺跡が表一の46、49、51、56、57など大體二〇kmくらいの間隔で七カ所も發見されている。

(19) 河南省については、楊育彬『河南考古』(一九八五、中國古籍出版社)の附録の遺跡表によって、河南省内の遺跡の全貌をほぼ知ることができるが、他の省については、現在のところ、このような網羅的な遺跡の紹介はなされていない。

(20) たとえば、秦の〈元年丞相斯造戈〉(考與文八三—三、頁二二)のように、最初の製造責任を示す銘と後刻の地名銘がある場合、後刻の部分は使用地を指すと考えられる。

(21) 以下でふれる表二「戰國出土文字資料地名表」によると、四分の一に近い都市遺跡において、製作場遺跡や貨幣、銅器の地名が重なっている。

(22) 戰國時代に發行された貨幣として、空首布、橋形方足布(橋形布)、尖足布、方足布、圓足布、三孔布、刀錢、圓錢などがあり、それぞれにもさらにバラエティーがある。ただし、空首布のうち大型のものは春秋時代に溯ると考えられ、

その銘文も地名ではないようである(拙稿「戰國出土文字資料概述」(林巳奈夫編『戰國時代出土文物の研究』一九八五、京都大學人文科學研究所)参照)。

(23) 一九五八、生活・讀書・新知三聯書店。

(24) それぞれ、文參五八—六・頁六五、鄭家相・頁一〇三および考八〇—一・頁八五など。

(25) それぞれ、文參五八—六・頁六五、考八八一—二・頁一八〇、考六五—四・頁一六七、文八一—一・頁六二、考七五—四・頁二三八、鄭家相・頁九七。

(26) 註(23)鄭家相書の鄆(蔓邑、郢)、莘邑(郛、金邑)、朱邑(郛邑、郛、剌)、坪陰(平陰、差陰、郛(守邑、郛、號)、平周(平陶)、豕韋(慮虎、慮虎、膚虎)、魯陽(慮陽、虞陽)、馬服邑(馬離、馬雍、馬服邑)、踐土(土匄、土易)、鄆(鄆、鑄邑)など(カッコ内は異説)。

(27) それぞれ、鄭家相・頁九四、王毓銓・頁四三、陳鐵卿「談『安陽布』的鑄地」(文參五六—二・頁六一)。

(28) 後述の譚其驤氏の地圖(註30)にも、平陽、安陽、高都、蒲坂、新城、陽城など二カ所に同一地名が記されている場合がかなりある。

(29) 註(23)鄭家相書の戈、宗、壤陰、鄆氏、毋丘、邪、城、匄陽、商成、平州、壽陰、木邑、垂など。

(30) 一九八二、地圖出版社。

(31) ただし、註(23)鄭家相書などは、ほとんどすべての貨幣に地名比定を行なっているが、かなり強引な比定もあり、そのようなものは用いなかった。

(32) 考學七四—一、頁四〇。

(33) 武器では、7 闕與（山西文物一・一七）、23 潞（『露』文八六一・頁九、文博八七二・頁五六）、44 邢（文八二一九・頁四五、文八八—三・頁五〇）、77 啓封（考八〇—五・頁四九八）、82 桐丘（考八七一・二・頁二一〇七）、102 燕（『武陽』考八八—七・頁六一七）があり、その他の銅器としては安邑（文七五—六・頁七二）がある。

(34) 註(12)論文。なお、武器以外の銅器として、14 漆垣（文六四—九・頁四三三）、109 雍（文八三—六・頁四）を附け加える必要がある。

(35) 註(22)。

(36) 咸陽、鄭は一國の首都であり、許、成都も後代大都市に成長している。

(37) 地方の縣の陶工の存在を示す印文を有する陶片は、ほとんど始皇陵周邊の遺跡から出土していることから始皇陵造營に係わるものであり、このような陶器の製造の開始もそれほど古く遡らせることはできない（註(22)拙稿、頁四三〇）。

(38) 註(13)。以下、『史記』魏世家、穰侯列傳の解釋については、この拙稿参照のこと。

(39) 註(7)。

(40) 馬王堆漢墓帛書整理小組編、一九七六、文物出版社。

(41) 『史記』では、縣、都、城の語がそれぞれ互いに言い換えられることがあるが、みな城壁を有する都市を指していると考えてよいように思われる。なお、大縣については、銀雀山出土竹簡の庫法篇（文八五—四、頁三二）では「大縣二萬

家」となっている。

(42) 鄭逸麟「黃河下游河道變遷及其影響概述」（譚其驤主編『黃河史論叢』一九八六、復旦大學出版社）。

(43) 現代の開封市の地下三、四mのところまで明代の家屋の屋根が発見されており、宋代の開封城の地面は地下一〇mぐらいのところにあるはずだと推定されているが（註(42)鄭論文、頁一三五）、杉本憲司氏によると、近年實際に地下一〇mのところから宋代の橋が発見されたという。そうすると、戰國時代の大梁城はさらにその下に埋まっていることになる。

(44) 『史記』燕召公世家では聊、莒、即墨の三城となっているが、『考證』は聊を衍字としている。

(45) 『史記』燕召公世家に、齊が燕の内亂に乗じてその國都を攻めた時、「五都之兵」を動員したとある。このことによつて、齊には大量動員が可能な五つの特別な都市があったことがわかるが、一方ではこれら都市と他の都市の間には大きな格差があったことも思わせる。なお、楊寬氏は、臨淄、平陸、高唐、即墨、莒を「五都」とし、これらは他國の郡にあたるとするが（註(3)新版『戰國史』、頁二二三）、確證はない。

(46) 『史記』燕召公世家、『戰國策』燕策一。

(47) この時、呉に占領された楚都は、湖北省江陵縣北郊の紀南城とするのが一般的であるが、江陵縣西北三四kmの陰湘城とする説（江漢八六一）もある。だが、どちらにしても、柏學から直線距離で三百km前後はある。

(48) 郡はある程度まとまった地域内の縣—都市を統轄するものであり、その中に秦の支配に抵抗し続ける縣—都市があれ

ば、實質上置郡は不可能であつたと考えられる。

- (49) 『史記』趙世家。ただし、『戰國策』秦策一では三年、『韓非子』初見秦篇では三月となつてゐる。

- (50) 『史記』田單列傳。

- (51) 註(3)。

- (52) 一九八二、中華書局。

- (53) 馬氏の『秦集史(上)』では惠王一〇年(前三二八)の上郡設置が最初になつてゐる。

- (54) 馬氏の『秦集史(上)』では昭襄王二十一年(前二八六)とする。

- (55) 楊氏の註(3)新版『戰國史』によると、陶郡は穰侯魏持の死後、その封邑が郡とされたものであるが、前二五四年に魏に奪われたとしてゐる。また、馬氏『秦集史(上)』は、上郡を昭襄王四八年(前二五九)に秦の郡となつたように記すが、楊寛氏は前者でその二年後に韓に奪われ、秦が奪い返したのは前二四七年としてゐる。

- (56) たとえば、秦が韓の野王と邢丘を攻略してその上黨郡を孤立させ、趙を長平に破つたのは(前二二八)、前二六〇、註(13)拙稿参照)この第二期であり、秦軍による趙都邯鄲攻圍(前二五九、『史記』秦本紀)や上述の西周君の秦への降伏(前二五六)も同じ時期に入る。

- (57) 太田幸男「商鞅變法の再檢討」(歴史學研究別冊特集『歴史における民族の形成』一九七五、頁一一九。

- (58) 註(1)宇都宮論文、頁一一〇。

- (59) 『釋』史記・貨殖列傳』所說的、陶爲天下之中、兼論戰國時

- 代的經濟都會」(『河山集』一九六三、三聯書店、頁一一〇。  
(60) 「春秋會盟地理考—兩周地理考の二」(『田村博士頌壽東洋史論叢』一九六八、頁三三五。

- (61) 「姬姓諸侯封建の歴史地理的意義」(『中國古代王朝の形成』一九七五、創文社、頁二四七。

- (62) 貨殖列傳に見える前漢時代の「三河」の經濟的重要性は、すでに日比野丈夫氏も注目してゐる。ただし、氏は交通路の中心はこの時代になつて東方の陶から西のこの地域に移動したと考えてゐる(『史記貨殖列傳と漢代の地理區』『中國歴史地理研究』一九七七、同朋舍、頁九)。

- (63) 宇都宮氏も、『史記』貨殖列傳や『鹽鐵論』によりながら、前漢時代の大都市は華北の東方交通線上に集中するとし、またそれは『漢書』地理志の戸口統計によつて知られる大人口地帯とも重なるとしてゐる(註(1)、頁一一二)。

- (64) ただし、戰國時代に盛んになる水路の開発によつて新しい交通の中心が生れたことは當然考えられる。陶の發展がこれによるものである可能性は十分あるが、それによつて從來の交通路が衰退したとは考えられない。

- (65) 三晉地域に人口の極端な都市集住をもたらしたものとして、鐵器と牛耕の普及による生産力の増大にもとづく小家族の析出が想定されるが、鐵器、牛耕の普及がいつ頃から始まるかについては異論が存在する。私は春秋時代末頃から普及し始めるのではないかと考えてゐる。

- (66) 註(13)拙稿、頁四三、四六参照。

- (67) 劉龍啓、李振奇「河北臨城柏暢城發現戰國兵器」(『文八八

一三、頁五〇。

- (68) このような三晉兵器の銘文の読み方は黃盛璋氏の上掲註(32)論文によって確定された。
- (69) 邢は趙地のもと邢國のあつた地と韓、東周、魏に属した邢丘との二地が考えられるが、「執轡」の語と出土地からこの戈は趙の邢のものともみなされる。
- (70) 註(13)拙稿頁四四、表一参照。
- (71) 佐原康夫氏も、三晉都市は長期の籠城戦に耐えることができるよう官僚的に財政機構が整備された軍事都市であったと理解している(註(12)論文)。
- (72) 註(23)。
- (73) 註(22)拙稿、頁四〇六。
- (74) 縣令は漢代では明らかに皇帝の直任官であるが、戰國時代でも、鄭令となった西門豹の例(『韓非子』外儲說左下)でもわかるように君主が直接任命したようである。そして、戰國時代の縣は、君主によって中央集權的に支配される直轄地として一般に理解されている(増淵龍夫「先秦時代の封建と郡縣」、『中國古代の社會と國家』一九六〇、弘文堂、頁四四四)。
- (75) 註(3)楊寬書新版、頁二二一。ならびに註(13)拙稿、頁四八参照。
- (76) 好並隆司「戰國魏政權の派閥構造」(東洋學報六〇—三・四、一九七九)、頁八一。
- (77) 註(3)楊寬書新版、頁一七三。
- (78) 『韓非子』内儲說下に「白圭相魏」とあり、また惠王の時
- の人物であることは『史記』貨殖列傳の該傳の〈考證〉所引の張文虎に考證がある。
- (79) 司馬遷も本傳で「蓋天下言治生祖白圭。白圭其有所試矣。能試有所長。非苟而已也」と言っている。
- (80) 宇野茂彦「魏の客士登用と孟軻」(中哲文學會報一、一九七四)、頁二一八。
- (81) 註(3)、頁一八〇。
- (82) 『史記』老子韓非列傳。
- (83) 拙稿「賢」の觀念より見たる西漢官僚の一性格」(東洋史研究三四—二、一九七五)、頁二〇三。
- (84) 註(13)、頁五一。
- (85) 中國の古代官僚は、必ずしも君主に對して隷屬的な存在ではなく、きわめて自律的な側面も有していた(註(83)拙稿参照)。三晉地域の獨立的な都市こそが、それに對應したこのような自律的な官僚を生み出したのではなからうか。
- (86) 註(22)拙稿、頁四四四。以下の銅兵器、貨幣に關する具體的な論證も本稿の當該箇所を参照のこと。
- (87) 註(13)拙稿、頁四三。
- (88) 〈四年尹令略戈〉(奇觚 10・27)、〈十八年秦工戈〉(河北選集 14) など縣令が最高統轄者となっている場合もあるが(註(22)拙稿、頁四二四参照)、きわめて例外的である。
- (89) 齊では、陳氏一族の勢力が強かったため中央集權化が妨げられたとする考えもある(太田幸男「田齊の成立」、中國古代史研究會編『中國古代史研究 第四』一九七六、雄山閣出版、頁二九〇)。

- (90) 岡田功「楚國と吳起變法―楚國の國家構造把握のために―」(『歴史學研究』四九〇、一九八一―三)。  
 (91) 解學東「先秦時期・重商・思想初探」(『河南大學學報』(哲・社)一九八五・六、頁三二)。  
 (92) 『史記』秦始皇本紀。註(13)拙稿、頁五六參照。  
 (93) 『史記』秦始皇本紀に「徙天下豪富於咸陽十二萬戶」とある。  
 (94) 『史記』秦始皇本紀に「發諸管漕亡人・贅墻・賈人略取陸梁地、爲桂林・象郡・南海、以適遺戍」とある。  
 (95) 『史記』秦始皇本紀に「郡縣少年苦秦吏、皆殺其守尉令丞、反以應陳勝」とある。  
 (96) 『漢書』高帝紀に「六年冬十月、令天下縣邑城」とある。  
 (97) 『史記』平準書に「高祖乃令賈人不得衣絲乘車、重租稅以困辱之」とある。  
 (98) 『史記』平準書に「孝惠・高后時、爲天下初定、復弛商賈之律。然市井之子孫亦不得仕宦爲吏」とある。  
 (99) この時代、黃老術を實踐した人物として、惠帝の時に丞相となった曹參(『史記』曹相國世家)、武帝の時に九卿にまでなった汲黯(『史記』汲黯列傳)などがある。また、武帝の初年には、その祖母の竇太后が黃老術を好み、朝廷内に大きな影響を与えたと言われる(『史記』外戚列傳)。  
 (100) 『史記』平準書に「至孝文時、……令民縱得自鑄錢」とある。  
 (101) 『都市の經濟學―發展と衰退のダイナミクス』(中村達也、谷口文子譯、一九八六、TBSブリタニカ)、頁二二八。こ

こで女史は、都市經濟を不活性化する帝國の政策と取引の主要なものとして、(一)長期化した開斷のない軍需生産、(二)長期化した開斷のない貧困地域への補助金、(三)先進―後進經濟間交易の重點的促進の三つを挙げている。

#### 著録等略稱一覽

王毓銓 『我國古代貨幣の起源和發展』、王毓銓、一九五七、科學出版社

夏華 夏華考古

河南 河南考古、楊育彬、一九八五、中州古籍出版社  
 河北選集 『河北省出土文物選集』、河南省博物館等、一九八〇、文物出版社

奇觚 『奇觚室吉金文述』、劉心源、一九二六

考古 考古

考古通 考古通訊

考古學 考古學報

考古文 考古與文物

江漢 江漢考古

侯馬盟書 『侯馬盟書』、山西省文物工作委員會、一九七六

山西文物 『山西出土文物』、山西省文物工作委員會、一九八〇

集刊 考古學集刊

第三次年會 『中國考古學會第三次年會論文集』一九八一、

第五次年會 『中國考古學會第五次年會論文集』一九八五、



中原 一九八八、文物出版社  
 中原文物  
 中原八三特 中原文物一九八三年特刊  
 鄭家相 『中國古代貨幣發展史』、鄭家相、一九五八、三聯書店  
 內蒙古 內蒙古文物考古  
 文 文物

文 參 文物參考資料  
 文 叢 文物資料叢刊  
 魯 故 城 『曲阜魯故城』、山東省文物考古研究所等、一九八二、齊魯書社  
 〔補記〕 本稿は、平成元年度文部省科學研究費補助金・一般研究（C）「春秋・戰國・秦漢時代の都市の構造と住民の性格」による研究成果の一部である。

## **CITIES OF THE WARRING STATES PERIOD AND THEIR GOVERNMENT**

EMURA Haruki

Two opposing views exist regarding the development of cities during the Warring States period. One attaches greater importance to economic factors while the other considers political and military factors to be more important. A study, based on recent developments in archeology, of the scale and distribution of the ruins of the cities of that period, has clarified the existence of a regional bias regarding these cities. In the Sanjin 三晉 region, centered on Henan province 河南省, there was a dense concentration of huge cities. Compared with this, the distribution and scale of cities outside the Sanjin region, with the exception of the national capital, were not so great. This kind of trend can be confirmed by reference to historical literature, archeological ideographic material etc. Furthermore, this kind of regional difference is largely concerned with the nature of cities themselves. In the development of the cities in the Sanjin region, a strong economic element is clearly evident. A remarkable inclination towards independence is also evident. On the contrary, the cities in the outlying regions were, as a rule, less developed and showed a strong tendency towards centralisation of power. There is a need to clarify the character and destiny of the "Warring State" nations and the Chin 秦 and Han 漢 empires based on this kind of difference in the regional character of the cities.